



札幌地区
たより

TO

と

MO

も

NI

に

第42号

発行日：2012年2月17日

●発行責任者：札幌地区長 勝谷 太治 ●発行所：カトリック札幌地区／札幌市中央区北1条東6丁目

札幌地区拡大宣教司牧評議員会の開催

日時：2012年1月21日(土) 10:00～16:00

場所：カトリック北11条教会 ホール

出席：司祭9名、修道者3名、各小教区代表、事務局

札幌地区の拡大宣教司牧評議員会が開催されました。会議に先立ち、勝谷地区長から修道会・小教区あてに、開催趣旨の説明と小教区での話し合いについて文書が発送されました。話し合いのテーマは次の3点です。

1. 小教区の適正配置について
2. ブロック体制の見直しについて
3. 信徒の養成について

このテーマについて、各小教区で話し合い、3ブロックごとにまとめを行い、ブロックの意見として会議で報告されました。それをもとに討議を行い、小教区の現状と課題・将来の展望などについて認識を共有しました。今回の会議は、意見をまとめるのではなく、生の声を積み重ねていくことで、今後の具体的な方針を決めるための参考にすることを目的としました。



1. 地区長から趣旨説明

札幌地区の今後の方向性について、皆さんの意見をきちんと吸い上げて集約し、新しい司教様に上申できればと考えて今日の会議を企画しました。しかし、各小教区・ブロックからは「まずビジョンを示してほしい」という意見がずいぶん寄せられました。それは重々承知していましたが、あえてこちらから案を出すことはせず、皆さんの意見を聞くことにしました。このような問題は、下からの機運が高まって、実現へ準備ができる段階になって具体化することがよいと考えています。

苫小牧における小教区の統合は、教区から提案したものではなく、信徒側からの自発的な行動により実現しました。今回も、こちらからは何も提案せず、現場での現状認識からはじめて将来を見通していくために、皆さんのゼロからの意見を聞きたいと思えます。

以前なら、司祭は自分の教会を守っていればよく、他の司祭と協力して地区や教区の大きな組織を運営していくことはありませんでした。しかし、今はそうはいきません。私たちは信仰についての専門家かもしれませんが、組織運営に関しては素人です。皆さんは社会の中でいろいろな経験をしてスキルを持っておられますから、いろいろなアイデアを出していただきたいと思えます。教会は世俗の組織とは違う面もありますが、社会一般の組織運営の手法を取り入れていかなければならないと考えています。

今日ここで結論を出すことは考えていません。出された問題を整理して次につなげていくという作業を積み重ねて方向性を見出していきたいと考えています。

お集まりの皆さんには、これまで教区ビジョンについて皆さん議論しながら、話合っただけで何も実現していないと感じている方もおられると思えます。私もその一人です。今回はそうならないように、実りある議論となることを望んでいます。皆さんのご協力をよろしくお願いいたします。



2. 討議の概要

討議は上杉神父の進行により行われ、はじめに東、中央、西の各ブロックから小教区での話し合いのまとめが報告され、そ

れをもとに全体で討議しました。午後からは小グループに分かれて議論を深め、最後にもう一度全体で話し合いました。冒頭、上杉神父から次の指摘がありました。

- ・教会では、修道者・信徒の意見をよく聞いて最終的に司教が決定する。必ずしも多数意見が採用されるということではない。
- ・ここは地区長に対する答申をまとめ上げる場でもある。3ブロックからの意見を幅広く議論して、方向性を合意・共有することが大きな目標である。

討議は3つのテーマごとに行われました。概要は以下の通りです。

1. 小教区の適正配置について

司祭の不足、信徒の高齢化などから適正配置（統廃合）は避けて通れないという認識は共有できたと思います。しかし、具体論になるとさまざまな意見が出されました。また、札幌市内と地方部では認識に違いがあり、各小教区それぞれの事情があります。ここでは代表的ないくつかの意見を記します。

①組織を統合し建物は残す

たとえば西ブロックを一つの小教区とみなして、財政や司牧体制を統一する。教会の建物は、西ブロック教会手稲聖堂、富岡聖堂という形で残す。

②カトリックセンターの設置

福音宣教の場として、また、司祭の健康管理、情報集約、病者訪問などさまざまな活動拠点となる複合的な施設を都心に近い場所に設置する。ビルのワンルームからはじめてもよい。

※カトリックセンターについては活発に議論が交わされました。積極的に進めるべき、必ずしも都心でなくともよい、既存の施設を利用すべきなどの意見がありました。

③札幌地区財政を持つ、あるいは一本化

札幌地区会計を拡充し、経済的に困窮している小教区を助ける財源を充当。（現行の地区会計とは、地区（宣司評）の活動費分を教区から支給を受けて執行しているだけ）

④福音宣教の視点

統廃合を司祭の不足や財政的な理由で行うのではなく、福音宣教の視点から適正な配置を考えていく。

⑤信徒が教会を守っていく

司祭不在でも信徒が協力して教会を守っていく。地域の特色を生かした小教区の在り方を考えたい。

2. ブロック体制の見直しについて

現在のブロック体制になって3年目なので、3ブロック体制は現状のままでよいとの意見が大勢です。しかし、中央と地方では取り組みに違いがあること、地方ではブロック活動をする余力がないとの報告がありました。また、1,000人を超える外国人信徒のほとんどは現在のブロック体制に組み込まれていないという課題も指摘されました。

3. 信徒の養成について

信徒の養成については、要理担当者養成講座の継続、葬儀奉仕者の養成、講座修了者の活用が必要であること。青少年の育成については、まず親の役割、小教区を超えた対応などの意見がありました。また、信徒の養成を進めるためには、司祭と信徒の役割を明確にすることが大事であるとの意見がありました。

終身助祭制度については、札幌教区ではこれまで取り組んでいませんでしたが、地区長は「これからは考えていかなければならない」とコメントしました。

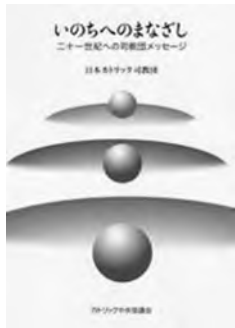
3. 地区長のまとめ

今日は皆さんの考えていることを知る上では、非常に参考になりました。活発な意見が交わされたカトリックセンターについては、以前から話題となっていました。財政的な裏付けがなければできません。教区の財政は赤字状態が続いています。財政が逼迫状態にあることを念頭においていただきたいと思います。そのことも適正配置を進める背景になっています。これからは大胆な発想も取り入れていかなければならないと考えています。

今日の皆さんの意見は地に足のついた意見だと思いました。今後も話し合いを続けていく中で具体化し、一つでも二つでも目に見える形で実現していきたいと願っています。

（広報 能町浄彦）





講演会 『いのちへのまなざし』

東京教区補佐司教 ヤコブ 幸田 和生
2001. 11. 13 カトリック北11条教会

『いのちへのまなざし』は、21世紀のはじめにあたり、わが国において「いのち」が大切にされる社会を建設していくための「出発点」としての利用を願って司教団が発表したメッセージです。それから10年が経過し、今一度その意義を考えるための講演会が開催されました。

(1) 『いのちへのまなざし』 2001年1月1日付

大聖年にあたり、20世紀の悲慘な歴史を振り返り、また、日本社会に生じている矛盾とゆがみにより、多くの人々が現実の中で光も支えも見いだせず苦しんでいる現状をみて、神がつくられ、御ひとり子をお与えになるほど愛された人間一人ひとりのいのちの尊さをあらためて確認し、神が全ての被造物に注がれるまなざしが、わたしたち一人ひとりのまなざしとなり、全ての人が与えられた命を十全に生きることを願って、このメッセージが発表されました。

このメッセージは、家族問題、離婚、高齢化社会、自殺、死刑、科学の進歩など現代社会における諸問題を取り上げ、神の光に基づいた人間の生きるべき姿勢を伝えています。また、これまで教会が様々な機会に公にしてきた文書と異なり、「教会の考えはこうである」という断定的な表現を避けて、このメッセージを受けて、一人ひとりが自らの生き方を振り返り、良心に従い、自らの責任において判断し、決断することを促しています。

(2) 自死の問題

日本の自殺者は1998年に3万人を突破し、それが13年続いています。『いのちへのまなざし』時点の統計では「2年連続」でしたが、この問題に10ページを費やしています。

教会はこれまで自殺を否定的にとらえてきました。自殺はいのちの与え主である神のみ心に背くことであるという理由からです。しかし、自殺の原因は行為者個人だけでなく、社会や環境にもあります。この世の生を終えた人々を、「神がどのように裁き、どのように受け入れられるのか」、それはわたしたち人間の思いをはるかに超えた神秘です。裁きは、すべてを見通される神の手に委ねるべきです。この世界の複雑な現実と、人間の弱さを考えるとき、わたしたちは自殺したかたがたの上に、神のあわれみが豊かに注がれるであろうことを信じます。これまで、教会が自殺者に対してとってきた態度を反省し、神のあわれみとゆるしを必要としている故人と、慰めと励ましを必要としている遺族のために、心を込めて葬儀ミサや祈りを行うよう、教会共同体に呼びかけています。

(3) 原発の問題

『いのちへのまなざし』では、「生命科学の進歩と限界」というテーマで、「科学技術の進歩」は「無原則に利用してしまうならば」「わたしたち人類を死と滅びに追いやってしまう」「その一つの極端な例として、核エネルギーの発見とその利用」として、科学の進歩を肯定しながらも、その無原則な利用に警鐘を鳴らしました。

しかし、東日本大震災によって引き起こされた福島第1原発事故に直面して、司教団は『いまずぐ原発の廃止を』という新しいメッセージを発表しました。『いのちへのまなざし』では、いまずぐに原発を廃止することまでは呼びかけていませんが、福島第1原発事故という悲劇的な災害を前にして、そのことを反省し、日本にあるすべての原発をいまずぐに廃止することを呼びかけています。

いまずぐに原発を廃止することに対して、エネルギー不足を心配する声があります。しかし、なによりもまず、わたしたち人間には神の被造物であるすべてのいのち、自然を守り、子孫により安全で安心できる環境をわたす責任があります。利益や効率を優先する経済至上主義ではなく、尊いいのち、美しい自然を守るために原発の廃止を今すぐ決断しなければなりません。また、原発はこれまで多量の放射性廃棄物を発生させてきました。これらの危険な廃棄物の保管責任を後の世代に半永久的に負わせることは、倫理的な問題として考えなければなりません。

確かに、現代の生活には電気エネルギーを欠かすことはできません。しかし大切なことは、電気エネルギーに過度に依存した生活を改め、わたしたちの生活全般の在り方を転換していくことなのです。わたしたちが神から求められる生き方、つまり「単純質素な生活、祈りの精神、すべての人々に対する愛、とくに小さく貧しい人々への愛、従順、謙遜、自己犠牲」などによって、福音の真正なあかしを立てる務めがあります。わたしたちは、この福音的精神に基づく単純質素な生活様式を選び直すべきです。またその精神を基にした科学技術の発展、進歩を望みます。それが原発のない安心で安全な生活につながるでしょう。

「いのちのおとずれクリスマス」

絶望の向こうにこそ見える「希望」とは・・・

2011年12月23日（金） 札幌共済ホール 参加者250名以上



草柳隆三氏 雨宮慧神父

“私はこの三つの言葉「光」「いのち」「愛」を、安らかに守られている母と子の永遠の姿のなかに表示したいのだ。愛する子どもたちよ、このマドンナの絵はお前たちみんなの心の『よりどころ』としてほしい。人間は苦しいとき、ぐらつかないように心のなかに、何かのよりどころを持つことが必要なのだから。”

1942年、スターリングラードの攻防戦で、ソ連の反撃を受け逆にソ連軍によって包囲されたドイツ軍は氷点下40度という寒さと飢えの中、身を守るために塹壕を掘りました。その中で書かれたロイバーの手紙です。ロイバーは医師であり、牧師でもありましたが、子どもたちへの父親の思いに溢れた手紙です。

今年、市民のための聖書入門は開催場所を街のホールに移しました。札幌聖心女子学院コーラス部・オーケストラ部の賛助出演を得てクリスマスのメッセージ「光・いのち・愛」が生き生きと伝わっていきました。たくさんの方々が生徒さんの清らかな演奏に心が洗われる思いだったと感動を伝えてくださいました。アヴェ・マリアの演奏にのせた草柳さんの朗読と鋭い質問は私たちをより深く、聖書の世界に連れてくれました。

『よりどころ（聖書ではとりで）』をキーワードに雨宮神父様の聖書解説が展開されました。

詩編—神を賛美する詩

詩編は「賛美の詩編」と「嘆きの詩編」に大別される。しかし嘆きの詩編が圧倒的に多いのに詩編の書に「テヒラー（賛美）」という呼称が使われている。それは詩編の嘆きは神に向う信頼の祈りであり、神に希望のよりどころを見いだす賛美の祈りだからである。十字架上のイエスの言葉「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか」という嘆きの詩編は後半で「わたしは兄弟たちに御名を語り伝え集会の中であなたを賛美します。」と賛美に変わっていく。

アブラム（アブラハム）—神の言葉をよりどころにする生き方

地縁・血縁から離れて神を結び目とする共同体へと出立するように指示されたアブラムは、神の言葉に従って行動する信仰の人である。しかしだからといって人間的な弱さが完全に払拭されはしなかつ



ロイバー作 塹壕のマドンナ

た。様々な苦難を乗り越えながらかなりの月日が経っているにもかかわらず、「あなたを大いなる国民にし」「あなたの子孫を大地の砂粒のようにする」といった約束が果たされないことに不満を爆発させても、神は「あなたから生まれる者が跡を継ぐ」と述べ、満天の星空を見上げさせて「あなたの子孫はこのようになる」と繰り返しただけだった。新たな保証は何もない。それなのに「アブラムは主を信じた」。直訳すると「主において自分を確かにした」となる。神を確かなものとして信じる。信じるということは何を『よりどころ』にするかということの選択である。選択とは疑いが残っても当然なのである。イサクを捧げなさいとの理解不能な神の指示に従ったアブラムは真の希望は人間の望みを超えたところにある

と信じた人である。

ヨブ—苦難に真正面から向き合った人

ヨブは義人として正しく生き、敬虔な信仰を持った非の打ち所のない人物だった。ところがあるとき神にすべての子どもと使用人、家畜を殺され、自分自身も頭のとっぺんから足の裏まで重い皮膚病に苦しむことになった。はじめは悟りきった人のように苦しみを受容しようとしていたがやがて「罪もないのに突然鞭打たれ、殺される人の絶望を神はあざ笑う」と神の不当性を訴える。3人の友人はヨブが苦しむのは何かしらの罪を犯したからだと判断し説得しようとする。若き哲学者エリフとの教義論争でも効果はなく、ついに神が登場する。神の答えはヨブの訴えとおよそかけ離れたものだったのにヨブは「自分を退け、悔い改めます。」とあっさり白旗をあげる。神は3人の代表にも現れ「お前たちはわたしについてヨブのように正しく語らなかった」という。何とも不可思議な神の答え。神の考えるよさ・正しさと人間のそれにはズレがあり、今の状況をうまく説明できるような折り合いを簡単につけるのではなく、疑問はそのまま神に投げかけ神の言葉・思いを探し続けよと聖書は主張する。

疑いをもちながら派遣された弟子たち

弟子たちが宣教のためにガリラヤから派遣されたとき、イエスに会い、「ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」は「ひれ伏した。そして疑った」とも訳せ、全員が疑ったということもできる。それにもかかわらずそのまま派遣されたことになる。つまり宣教は他人に対してすることだが同時に疑いを残している私自身に宣教することでもある。その中で疑いが晴れていく。天と地の一切の権能を授かっているイエスが常に世の終わりまで共にいる、その中で疑いが消されていく。

今回の大震災に続く原発事故で緊急避難を命じられ「わたしはお墓に避難します」と自殺した93歳のおばあさん。その現実を忘れず、もっとよりよく生きることとの繋がりをどこに見つけるのか、どうしたら困難の中で希望を失わずに生きられるのかと考える。

ザカリアとマリア—神の支配への期待

天使ガブリエルによる洗礼者ヨハネ誕生とイエス誕生の予告はほとんど同じような告知と応答なのにザカリアは口の利けないものにされ、マリアは励ましを受ける。直訳で比較するとザカリアは「なにによって私はそれを知るのか」と答え、マリアは「ど

のようにしてそれは成るのか」と答えている。主語が違うことがわかる。ザカリアは自分を中心に事態を把握しようとし、マリアは自分ではなく、ガブリエルの言葉に注目している。その言葉への信頼を強めることができるなら、予告の実現、神の支配に期待を持つことになる。ザカリアはせっかくの神の言葉に「私」の枠から抜け出せず疑いで終わってしまう。

イタリア語にマガーリという言葉がある。「そんなの無理だよ、だけどそうだといいなあ」といったように使われる。そうだといいなあという思いを持ち続けることが様々な困難にぶつかる人生を生きる私たちにとって力になっていく。その思いを深めていくことが大切で信仰はマガーリといえる。『よりどころ』ということの中には「そうだといいなあ」という思いが含まれている。

再びロイバーの手紙です。

“絵の余白には、古い神秘の言葉「光」「いのち」「愛」の三つを記しておいた。黒い布の中のみどり児は、いっさいの「暗闇」と「死」と「憎しみ」を超えて輝く人類のいのちをあらわすのだ。われわれは死の体験を経ただけに、いっそう強く「いのち」を愛するのだろう。私はあの絵を平和に満ちた明日の「いのち」のしるしとしたい。”



札幌聖心女学院コーラス部・オーケストラ部による
“しずけき”手話付き演奏

※ 会場での募金10,311円は札幌カリタス災害支援募金としてお送りしました。ありがとうございました。

(文責：実行委員 小野幌 小野崎良子)

震災を乗り越えて、さあ、行こう！一新しき《よき知らせ》

2012年 1月8日 18:30～ エルプラザにて 参加人数約230名
主催：異文化・郷土文化を学ぶ会 「あったけの会」

「あったけの会」は、この山浦先生の講演会を開催するにあたって、急遽できた「会」です。「あったけ」とはケセンの言葉で「ありったけ」「たくさん」「超」という意味です。言葉の使い方はおかしいのかも知れませんが、山浦先生の講演会が実現できたならこんなうれしいことはないと思った時、心に浮かんだこの言葉がなんだかとてもしんが感じました。異文化・郷土文化を「あったけ」学ぼうという気持ちと、フットワークを軽くということだけを仲間で確認をとって、とにかく進もうと決めました。山浦先生はカトリック信者で話の内容も聖書の内容が主となりますが、信者の方ばかりでなく、一人でも多くの一般の市民の方たちにも聞いていただきたいという思いが強くなりました。たまたま希望の日に、札幌駅直結のエルプラザのホールが空いていたのもラッキーでした。この講演会が決まったのが11月の末、チラシができたのがクリスマス直前、カトリック札幌地区にも大急ぎで共催として協力をしていただきましたが、あと2週間、文字通り「ありったけ」の力をだしてお知らせに奔走する年末年始となりました。



震災後に放送されたNHK教育テレビ「こころの時代～宗教・人生」一私にとつての3・11（シリーズ～ようがす、引き受けだ～）で、山浦先生とイーピックスの熊谷さんが、その被災地で語っていた言葉に強く感銘を受けました。すべてを流された印刷所イーピックスの倉庫から「お水くぐりの聖書」が生還したのも奇跡のようなものでしたが、山浦先生と熊谷さんのケセン語・セケン語聖書翻訳のお仕事、震災の様子とともに全国に放送され、たくさんの方の知るところとなったのは本当に素晴らしいことでした。「聖霊が電波に乗った」と番組の再放送をお知らせして下さったある神父さまの言葉どおりだと思います。そしてその聖霊が、札幌にも「風」を送ってくれたと私は思っています。その後、1月8日の講演会のごことは各新聞に、お知らせとして、記事として取り上げていただき、たくさんの方の知るところとなりました。

「津波の時は、北海道の皆様大変お世話になりました」という挨拶から先生のお話ははじまりました。その後、3・11のときの大変な惨状を、臨場感たっぷりに、又その時のケセンの人々のようすを大変ユーモラスにお話くださり、会場の私達は、笑いと涙で、当時を思い、先生の話にドンドン引き込まれていきました。

東北のケセンという地域の方言で、聖書翻訳をなしとげた先生は本当に不思議な方です。

医者としての仕事をしながら、時間をかけて、ケセン方言を、ケセン語と称して、文法書を作り、大辞典を作り、発音記号まで作り、その果てに、聖書をギリシャ語から直接、念願のケセン語に翻訳、それをご自分で朗読して、CDに吹き込んでおられる。私も、「お水くぐりの聖書」を、大船渡で買わせていただいた一人ですが、我が家では、車に乗るといつも山浦先生の聖書朗読（CD）が聞こえてきます。信者でない夫とともにこんなに聖書が身近になったのは今までにないことです。先生の著書に「とうさんの宝物」という本があります。8人の子供達を育てた先生の奮闘記ですが、その中に、とうさんが子供達に毎晩寝る前に、聖書のはなしをしてあげている様子が描かれています。まさに、CDから流れる先生の聖書の朗読は、子供達と一緒に、その場で一緒に聖書物語を聴いているような、楽しさとうれしさややすらぎを感じます。講演の中で、先生は、「放蕩息子のたとえ」をケセン語で朗読してくださいました。先生は、この話は、「親ばかの話」だとおっしゃいましたが、確かに放蕩息子の生還をよろこぶ親のあふれんばかりの喜びが（親ばか？）会場いっぱいに伝わりました。おもわず会場から大拍手が沸き起こりました。

先生のケセン語聖書翻訳の次のお仕事はセケン語聖書翻訳となります。いよいよ聖書の舞台はケセンから、幕末の日本各地へと広がります。ガリラヤのイエシュと弟子達はケセン語、北は津軽から、南は薩摩まで、登場人物は、それぞれが各地のふるさとの言葉で語ります。まるでイエスが東北の三陸海岸にいるようです。この本は、4福音書を一冊のポケットサイズに、中には山浦先生の注釈、解説がわかりやすく書かれていて、しかも電車の中などで読んでいてもものものしく聖書を読んでいるとは気づかれないという配慮まで入っています。楽しいことが大好きとおっしゃる山浦先生は、今度は、着々と、朗読劇を企てていると思います。幕末聖書物語劇、楽しみですね。



最後に先生は、「祈り」と訳されているギリシャ語の「プロセホマイ」には「聞く」という意味があることを、ヘブライ語の「ダーヴァール」は「言葉」という意味の他に、「出来事」の意味もあることを指摘されました。震災で、たくさんの方も亡くなり、大変な思いは、今も、これからも残っており、本当は見たくもない、自分の殻のなかに閉じこもっていたい出来事です。でも、勇気を出してよく見ると、そこに神様のダーヴァール（言葉）があるのではということです。「神様の言葉は出来事の中にある」—この震災を通して、たくさんの方々の善意も、日本人としての誇りも見えてきたような気がします。「神様は何を望んでいるのか」、「神様の道具として私たちは何ができるか」を考えること、そこ

に人間として生きる本当の幸せがあるのではないが、そのためには命も惜しむなど、いう神の声が聞こえてくるような気がしますとお話されました。

「津波を超えて、さあ行こう！力強く、出来事の中にあるよき知らせを語ってくださった講演会でした。たくさんの方のご参加を「あったけ、あったけ」感謝いたします。



*皆様からいただいた、参加費、寄付金の中から¥55,477を東日本大震災市民支援ネットワークのむすびばへ寄付をさせていただきます。

*講演会の内容は、先生の快諾をいただきDVDにさせていただきました。各教会に一枚ずつ配布する予定です。当日講演会に来られなかった方、もう一度聞いてみたい方に是非、ご利用いただければと思います。

(小野幌 益田 英子)

「宮古での支援—私たちがこれからできること」

ベネディクト修道会 Sr.天野和子

震災ボランティアの募集が修道院にきていて、高齢のこともあり迷いましたが応募しました。しかし、6月の派遣の間際になって自転車にぶつけられ足を骨折してしまいました。

上杉神父様に報告すると、「それでは9月をお願いします」と言われました。けがは手術が必要なほどでしたが、順調に回復し、お医者さんも「中学生なみの回復力だ」と驚いていました。神様がすべてを整えてくださり宮古へ出発しました。札幌からは8人で出発し、台風の影響で船酔いに悩まされながらも無事到着。宮古教会には、全国からの支援物資が積まれていて、男性は聖堂、女性は司祭館に宿泊します。主任司祭マルコ神父様の心の広さに感動しました。

私は、仮設住宅のカフェとサロンのお手伝いをしました。ベールをどうしようか迷い、神父様にお尋ねすると、「宮古には修道院がないので、黒いベールの女性は誰も見たことがないと思います。皆さんの反応をみてから考えては」と言われましたので、ベールをかぶったまま集会所に行くと、おばあさんが一人いて、「あん



た、何者だ？」

「北海道から来ました。修道院というところにいます」

「あんたみたい人はじめて見た。その黒いのはどうしてかぶるの？」

「わたしたちの決まりなのです」

「ふーん。尼さんに似てるね。何て呼ぶんだ？」

「シスターって言うんです」

「シスターって何語だ？」

「英語ですよ」

「英語なんて聞いたことも、しゃべったこともない。シスターって言うのかい」

「ああ、おばあさん。今、英語話しましたよ」

おばあさんはにこにこ笑って「ちょっと待って」と言って出て行くと、3~4人連れてきて「この人シスターだ」。それでいろいろな話ができ、交流できて神様に感謝しました。神父様にそのことを話すと「それはよかった。これからはどこに行くにもベールを外さないように」と言われ、スーパーに買い物に行っても「どこの人？」「あなたなーに？」簡単に説明すると感心されるやら驚かれるやらで、帰るまでずーとこの姿でした。

また集会所に行くと、最初に会ったおばあさんが「今日はたくさん連れてくるから」と10人ほど連れてきていろいろお話ししましたが、東北の人は集落毎のつながりがとても強くて、逆に集落が違えば仮設住宅で隣り合っているけどほとんど話をしません。社協の人からは、「その人たちを交流させてほしい。それがボランティアの仕事です」と言われていました。それで、いろいろな地域の人と話をしました。地域ごとに訛りがあって、話が白熱してくると聞いてもわからなくなります。みなさんも自分の言葉が通じないということを初めて知ったようでした。「北海道から来た」というととても感激されます。海を越えてきたということに驚くようです。

ある時、おじいちゃんが焼酎の大五郎を肩に担いで窓からのぞき込んで、「女ばかりだけど入ってもいいか？」と訊いたので「どうぞ、どうぞ」と入ってもらいました。昼になるとみなさん一旦食事に戻ります。おじいちゃんは残って話しはじめました。「地震の当日は沖で魚を獲っていた。無線ですごい津波が来ているから戻るなと連絡が入った。夕方戻ってみると、家も家族もみんな流されていた。今は本当にひとりぼっちだ。この大五郎だけが友達だ」。私は「それはあまりいいものじゃかいから、時々は休んで、あまり飲まないほうがいいのでは」と言いました。おじいちゃんは「わかった。わかった」と言って帰っていきました。津波は本当に全てを流してしまいます。東京大空襲で焼け野原も体験しましたが、流されるということは焼かれることよりも大変なことです。みなさん何も持ってないんです。「バスタオル」がほしいと言われて、支援物資の中から10枚持っていきました。2枚ほしいという人にも「どうぞ、どうぞ」と差し上げたらずんば午前中で無くなってしまいました。午後から赤ちゃんを抱いたお母さんが2人、隣の人からバスタオルを配っていると聞いて来ました。その時はもう無くなっていて気の毒なことをしました。そういう失敗もありましたが、カフェでもサロンでも交流ができました。(次ページへ)

私の好きな言葉に「人は関わることによって成長する」というものがあります。はじめての人たちと関わって、私も開かれました。本当に感謝しています。戻ってから、お葉書をいただきました。「心を添えてくださってありがとうございます。わたしたちはみんな元気に前向きに生活しています。ありがとうございました」と書かれていました。

ボランティアを通して神様がわたしたちを働かせてくださいます。これから寒い季節になります。時が経つにつれて被災者のニーズも変わっていきます。わたしたちはできることを少しずつやるしかありません。これからも祈り続けます。この私でもできたのですから、多くの人が参加されますように。

(2011年10月15日に開催された中央ブロック シオンの会主催の支援集会での講話)

シリーズ 人権フォーラム〈第4回〉

子供の人権(2) 「傷ついたこどもたち～児童虐待」

講師：堤 邑 江さん(カリタス家庭支援センター代表)

2011年12月10日(土)〔世界人権デー〕15:00～17:00

聖ベネディクト・ハウス 参加者10名

主催 カトリック札幌地区・社会委員会



〈講演要旨〉

ソーシャルワーカーの立場から、ケースの発見、対応、連携について皆さんと分かちあいたいと思います。

2000年、児童虐待防止法が制定され、都道府県・政令都市の児童相談所が対応機関とされました。'04年の法改正により市町村も対応が義務づけられました。強制立ち入り調査や親権の一時停止も可能となっています。また発見した人には通告(通報)の義務があります。(罰則はない)

'09年報告によると、児童相談所、市町村への相談件数は合わせて10万件以上にもなります。子どもが死亡した件数は、虐待死47、心中30の計77ですが、半数以上が実母によるものです。うち67は0才児です。産みおとしてにげる(0才0日の死)ケースもありました。札幌の人が、熊本の赤ちゃんポストへ相談し、ポストから私のところへSOSが入り、おかげで対応できたこともあります。母の年齢も19才以下17例あり低年齢化しています。

いのちの教育、純潔教育の大切さを感じていますが、学校等の性教育では、多くの場合、性行為を前提とした避妊・性感染防止にとどまっていることにもどかしさを感じます。

児童虐待とは、子どもの身体や心を傷つけることですが、多くは両親又は養育にあたっている保護者によるものです。

- ①身体的虐待(33.3%、殴る、蹴る、激しく揺さぶる、たばこの火を押しつける)
- ②ネグレクト(34.3%、家や車に置き去り、食事を与えない、病院へ連れていかない)
- ③性的虐待(3.1%、子どもへの性的行為、ポルノの被写体などを強要、性器や性交を見せる)
- ④心理的虐待(23.3%、言葉による脅かし、ダメな子・ジャマだなどと言う、極端に無視する、他の兄弟と著しく差別する)などがあります。

虐待には種々の要因が考えられます。親が子どもの行動の正常な理由を理解できない、虐待としつけの区別がわからない、子どものときに虐待を受けたことがある(世代間連鎖)などです。子どもが、食が細い、夜なきする、未熟児である、障害があるなどの場合には危険性が増します。特に障害がある場合はその特徴を正確に知り、母と家族をささえる必要があります。地域や親族から孤立しているケースが多く、情報が届かず密室化されたなかでの加害・被害となっています。他に学歴・職種などによる差別、収入格差など社会的要因があります。

虐待は子どもの身体的・心理的発達に重大な影響をおよぼします。年齢に比して体格が著しく劣っている、様々な反応が「激しすぎる」や「欠如している」、社会生活上の技能や知識を得ていない、問題を力で解決しようとする、威嚇的な言動、要求が阻止されたときガマンできない、強い大人に対する極度の恐怖、衛生管理に欠けるための種々の疾患、性化行動、性教育教材への異様な関心、対人関係での感情のやり取りに関して著しく不安定、など多く影響があります。

私達は地域住民として子どもに関心を持つことが大切です。発見したときは、専門機関の児童相談所や区役所家庭児童相談員などへ通報してください。48時間以内に安否確認がなされ、対処されることになっているのですが、無関心から通報が少なすぎるのです。虐待に気付きながら、関わりを避けて引越して行った例もあります。妊娠出産を含め早期からの声かけ、見まもりも大切です。出産費用の支援や里親・養子縁組制度もあります。子育てのHow toを提供する意味でも、子育て中の家族への声かけ、ご近所付き合いは、力強い支援になると思います。

虐待に関係する諸機関(児童相談所、保健センター、医療機関、市町村福祉担当課、児童養護施設、警察など)との連携は、①子どもを保護する、②親を教育する、観点から今後増々重要になってくるでしょう。

子どもと子育て家族に温かい関心を向け、人と人とのつながりを強めていく社会にしたいものです。

(社会委員会 松井洋治)